

# みんなで考えよう 老後の暮らし

## 深刻な老人問題

### 求められる老人への理解

老人福祉法では六十五歳からを老人としています。わが国の人口構造は、これから急速な高齢化の道をたどるといわれています。厚生省の人口問題研究所の推計では、六十歳以上の人口が現在の十一割から二十五年後には十九割になり、三十五年以降は二十三割という高水準で推移するという。現在はその高齢化社会の入口にたつています。

若い者にもいつかはくる「老い」の問題。十五日は「敬老の日」。



楽しくゲーム、前浜高齢者教室で

男七十・一七歳、女七十五・五八歳。これは昭和四十六年の日本人の平均寿命です。昭和三十年の男六十三・六〇歳、女六十七・七五歳に比べると実に七・八歳も伸びています。

長い間、郷土のためにつくされてきたお年寄りのみなさんがおかれている現実の姿は、はたしてどうでしょうか。「豊かな老後」を送っているのでしょうか。

全国で一年間の老人の自殺者は五千人にのぼるといわれます。人口十万人当たりの自殺率をみると、青壮年代は平均十六・七人だが、六十五歳以上は五十三・四人、青壮年代の三倍以上です。この自殺

率は、男性が世界九位、女性が世界一だといわれます。

#### 病気・孤独

#### 経済不安

「老人県日本」の本県は、六十五歳以上の自殺者を男女別に、十万人当たりで見ると、男は全国平均の五十七・七人に対し六十六・七人、女は四十五・九人に対し四十二人。女はどうかやう全国平均以下だが男は大きく上回っています。

何がそうさせるのか。老人の自殺は「病気」「孤独」そして「経済不安」が最大の原因といわれます。

病気と経済不安。四十八年の政府世論調査（五十歳以上の三千人の男女対象）では、国に対する要望で医療費無料化の年齢引下げ要望が三十八割、年金をふやすが六十三割とされています。これはいすれも、病気と経済に対する不安を裏づける数字となっています。

#### 「スープのさめない距離」

ひとり暮らしの老人が誰にも知られず死んでいる——最近、こうした悲惨な事故が全国でおこっています。誰にも知られず——まさしくそこにお年寄りの孤独が象徴的にあらわれています。

ヨーロッパには「スープのさめない距離」という言葉があります。お年寄りと肉親がスープのさめない距離に住み、心と心のふれあい、交流を保つ大切さを言い願わしているのです。

お年寄りの大多数は家族と一緒に住みたいという願望をもっていますが、同居できない理由には、住宅事情に根ざした問題があります。

す。政府の世論調査でも、持ち家居住者の八割は同居ですが、賃貸住宅にすむ者では五十一割しか同居していません。

あげることです。お年寄りを粗末にする——それは早晩、わが身にふりかかってきます。

#### 市の老人福祉

南園市には現在、五千七百人ほどのお年寄りがいます。

市は市政の基本方針として「生命とくらしを守る市政」をかかげ、長い年月を郷土のためにつくされてきたお年寄りに、しあわせな余生を送っていただきたいと、老人福祉対策をすすめています。

これは、土佐清風園など特別養護老人ホームや一般老人ホームにおられる人に対する扶助費、市独自の老人年金、老人医療費助成制度、愛の一声運動、高齢者教室など、さまざまな角度から老人福祉の充実にとりくんでいます。

また、待望の福祉センターがこの九月に完成の予定です。福祉センターは、市内の老人クラブからおこった「老人にこいの場を」という声が大きく発展、「青年には明日がある、老人にはいますぐ暖かい手をさしのべてあげたい」と総事業費、二億三千万円で、水道局北側に建てられました。

### これからもお元気で 市一番の長寿者



山下須磨さん 98歳

市内一番の長寿者、山下須磨さん、明治十年九月三十日生れ、九十八歳。入道雲の湧く益がかり、下島浜のお宅をたずねました。

須磨さんは、耳が少し遠いほかは、これといって悪いところはなく元氣な様子、健康のことを尋ねると、「自分のまわりのことなら洗濯ぐらいはできます」との返事。「家族の方も、ええ、針仕事も自分でやれます」といふほどの元氣さです。

「夜でも、灯があれば一里ぐらいいは歩けます。お寺さんへ杖をついておまいりにゆけます。ありがたいことです」と深く合掌する須磨さんです。

来意を告げた時も、「私のためにこの替い中を、すみません」と丁寧に頭を下げられた。須磨

さんは、神や仏の前を通る時、頭を下げるにはいられない、と言います。このインタビューをしている時にも、何度もなんども合掌する、それは、ひたすらに無垢な感謝の心でした。

若い頃、三人の子どもさんをつれ、仕事にあげくれ、それはもうつらい毎日だった、といいます。

「私よりも若い人が、先に逝ってしまいます……」

友だちが逝ってしまう——それが何よりも須磨さんには淋しいことのようにです。

五人のお孫さんにかまわれている須磨さん、健康にめぐれぬも気をつけて長生きしてくださいね。

調査結果によると「将来、子どもと同居したい」と答えた人が七十六割で「同居したくない」の十四割に比べると圧倒的に多くなっています。また、別の調査でも、老人ホームに「入りたい」はわずか三・四割で「入りたくない」は八十四・七割となっています。入

りたくない、という理由には、子どもや孫と離れたくないということが考えられます。

「スープのさめない距離」——要は心と心のふれあいです。まわりにいる私たちにできることは、肉体的、精神的におとろえていく老人に常に暖かい心づかいをして

